

芸術教育カリキュラム 開発支援(音楽)

子どもたちが音楽の楽しさを知り豊かな情操を育む機会を!



【事業対象者】

- プレイベン州コンポントラバエク郡の中核校(中心校)等9校
- 学校長9名(1校1名×9校)、
教員27名(各校3名×9校)
- 教育省職員1名、
プレイベン州教育局職員1名、
コンポントラバエク郡教育局職員1名
- 各学校の生徒(全4553名)及び地域住民

■対象校中間調査(2015年6~7月)

事前調査時からの関係者の意識の変化を計るとともに、学校の音楽教育環境の変化や子どもたちの変化を調べることを目的にインタビュー調査を実施しました。これらの結果は、プロジェクト終了時調査結果と併せて、プロジェクト評価に使用されます。また、インタビュー終了後に、各校における音楽活動の発表について確認し、実施に向けての話し合いを行いました。

■各学校での音楽活動の発表(2015年6~7月)

各学校の環境やスケジュールの状況、教員の習得度合いを考慮した結果、まずは小規模で子どもたちが発表できる機会を設けることを目標に、郡教育局職員、学校長及び対象教員が指揮をとりながら、可能な範囲で実施してもらいました。各学校が大小様々な発表を行いました。その中の1つピチルア小学校の子どもたちは、当会が建設した同じ郡内のクランリウ小学校の贈呈式で発表の機会を得ることができました。(表紙写真参照)

■第3回対象教員トレーニング(2015年9月8~10日)

2014年1月の事業開始から第3回目となるトレーニングを実施しました。中間授業観察及び中間インタビュー調査の結果を受け、専門家との話し合いの元、「教員の音楽の力の更なる改善と向上」に焦点を合わせ、第1、2回のトレーニングで学んだ曲や音楽知識について再確認するとともに、教員自身がしっかり歌えるようになること、生徒の歌を聴いてその良さや改善点ができるようになること(聴く力の向上)を目標とし実施しました。

具体的には、曲数を5曲に絞り、1歌唱、2聴く力、3リズム、4音符の基礎及び器楽(歌唱を助けることに重点を置く)、の4点について重点的に指導しました。また、新たな試みとして、課題となっていた「リズムを取る力」を改善するアプローチとして、西洋的なリズムではなく、対象者に馴染みのあるカンボジアのリズムを取り入れました。



プロジェクトの背景

カンボジアの音楽教育は、教育課程の中で独立した科目でなく、小学校では「社会科」の一部として位置付けられており、指導に十分な時間数がありません。また、学校の経済状況や教員の技術・知識が十分でないことから授業が実施されていないケースもあります。指導されている学校でも、指導内容は歌詞の書き写しや伝統楽器の名称を覚えることなどに限られており、子ども達が音楽に親しみ、音楽を通した「自己表現」活動により、協調する力や表現力、豊かな感性と心などの情操を育む機会は極めて少ないと言わざるを得ません。



■対象校への生徒用教科書の配布(2015年11月)

小学校の新学期が開始したことを受けて、対象校9校において生徒用教科書の配布を行いました。この教科書は、新学期開始と共に、1年間学校で生徒が使用し、そのフィードバックを元に最終的な改訂を加える予定になっています。

■第4回対象教員トレーニング(2015年12月15~17日)

本トレーニングの目的は、実践を通して「子どもたちの音楽表現を高める指導の方法」及び「計画性や発展性を考えた上での授業デザイン」を学ぶこと。音楽教育活動専門家の山田俊之氏を講師に迎え、参加者に期待される要素を次の5点としました。

- ①教員の指導により子どもたちの表現が高まることを参加者が実感する、
- ②レッスンプラン内に発展的な段階を取り入れることにより、参加者が学習の積み上げを実感する、
- ③基礎的なリズムを取る力の改善、
- ④複数の要素を組み合わせた指導コンテンツ(ボディパーカッション+クメールの楽曲やリズムの取り入れ等)、
- ⑤作品の創作、発表による達成感を得ることで、発表機会の提供の重要性を実感する。

また、授業デザインは、3つの発展段階を取り入れた構成を基本としました。①リズムを打つ(基礎学習)、②リズムを重ねる(音楽を組み合わせて楽しむ)、③作品になる(楽曲の構成や表現の高まりを知る)。

3日間の研修を通して、参加者は、基本となるリズムパターンの学習など「リズムを打つ」活動、音楽に合わせてのボディパーカッションやリズム曲など「リズムを重ねる」活動、最後に近隣の学校から50名近くの中学生を招き「作品を創作し発表する」活動を体験することができました。



■対象校音楽教員授業観察・日本人専門家派遣(2016年3月)

2年半に渡る本事業の最終調査の一環として、対象校における音楽活動の状況の変化と成果、また、課題を把握するための最終授業観察会を実施しました。

この最終授業観察会は、本事業のアドバイザーで、事前調査の第1回より観察に参加している音楽教育専門家である国立教育政策研究所 教科調査官の津田正之氏を招いて実施されました。